

「松山の授業モデル」について—交流し考える学習—

松山市教育研修センター事務所

Q 「交流し考える」とは、どういうことか。

- 多様な感性や考え方等に触れ、刺激し合う活動を通して、自分の感性を磨いたり、見方や考え方を広げ深めたりすることです。
 - 他者等と交流する前提として、自分の考えがあること（よく考えたけど、今の時点では分からない、決められないという考えも含めて）が必要です。
 - 現行学習指導要領における資質・能力を育むための学びの質に着目した授業改善の取組を活性化していく視点は、「主体的・対話的で深い学び」です。「対話的な学び」とは、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」ことであり、資質・能力の育成のためには、教師が教え込むのではなく、学習課題の解決（指導のねらいの実現）に向けて、交流し考える学習が必要です。
 - そもそも学校は、「協働的な学び」の場です。したがって、子ども一人一人が、多様な「ひと・もの・こと」と相互主体的に関わり合って学ぶことこそが、本来の姿と言えます。
- ※ ねらいが明確でなく、必然性もない、形骸化した交流活動にならないよう十分注意しなければなりません。

【参考】

- 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』（中学校も同様）
 - ・ 「主体的な学び」とは、「学ぶことに興味・関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習を振り返って次につなげる」こと
 - ・ 「対話的な学び」とは、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」こと
 - ・ 「深い学び」とは、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」こと
- 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中教審答申 令和3年1月26日）
 - ・ 「『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた（中略）『協働的な学び』を充実することも重要である。」
 - ・ 「子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。」
 - ・ 「同じ空間で時間を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある。人間同士のリアルな人間関係づくりは社会を形成していく上で不可欠であり、リアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、（中略）Society5.0時代にこそ一層高まるものである。」

- ・ 『協働的な学び』は、同一学年・学級はもとより、異学年の学びや他の学校の子供との学び合いなども含むものである。」

Q 「交流し考える」活動には、どのようなものがあるか。

- 「松山の授業モデル」に例示しているものはありますが、指導のねらいを実現するように、交流する対象や活動、形態等、創意工夫することが必要です。
〈対象〉 子ども同士、教職員、地域の人、先哲の考え方など
〈活動〉
 - ・ 交流（ペア学習、グループ学習、話し合い活動など）
 - ・ 表現（発表会、討論会、創作活動など）
 - ・ 体験（観察や実験、作業、実技など）

Q 「交流し考える学習」に関して、留意点として「発問」を取り上げているのは、なぜか。

- 子どもの思考を活性化する教師の働き掛けとしては、板書や資料提示、ICT活用など様々なものがありますが、中でも「発問」は非常に大きな役割を担うからです。
- 文部科学省は、「ゆさぶる発問」について、
 - ・ 広義には、子どもたちの学習に変化をもたらす緊張を誘う発問のこと
 - ・ 狭義には、子どもたちの思考や認識に疑念を呈したり混乱を引き起こしたりすることによってより確かな見方へと導く発問のことと述べています。

また、「発問の要件」として、

- ・ 何を問うているのかがはっきりしていること
- ・ 簡潔に問うこと
- ・ 平易な言葉で問うこと
- ・ 主要な発問は、準備段階で「決定稿」にしておくこと

を挙げています。

さらに、「質問」との違いについて、

- ・ 「質問」は、子どもが本文（教科書等）を見ればわかるもの
- ・ 「発問」は、子どもの思考・認識課程を経るもの

と述べたうえで、学年や場合によっては「質問」によって確認することが必要な場合もあるとしています。ただし、質問ばかりだと学習意欲が低下するため、一問一答や答えが「はい・いいえ」等にならないよう注意を促しています。

- 「発問」は、ある意味、授業の質（「深い学び」につながっていくかどうか）を決めるといっても過言ではありません。教師が投げかけた発問によって、見方・考え方を触発された子どもたちから新たな問いが発せられ、広がっていくような授業を目指したいものです。

※ 「発問」が子どもの思考を活性化するのに有効な働き掛けであることは間違いありません。しかし、だからといって「質問」が不要なものでもありません。大切なことは、それぞれの働き掛けについて優劣を決めることではなく、教育効果を考えた的確な使い方をすることです。「発問」に加え、「質問」、「指示」、「説明」等、教材研究の過程で、よく練っておくことが求められます。